

ベリーショート賞

衛星軌道上の救世主 太刀川るい

大気の外であるロボットが目を覚ますと直ぐに、彼は自分が地球に向けて落下していることに気がついた。

ロボットは今の状況を説明するべく記憶、彼にとつては過去のデータを参照し、推測を開始した。

数時間前に事故が起こった。その事故は深刻で、死傷者は出なかったものの、ロボットの記憶はその事故を境に途切れていた。

彼は自分の体を確認した。パーツの幾つかは抜き取られていた。ぐちゃぐちゃにひしゃげた使えないパーツに混じって幾つかのパーツが辛うじて稼働を続けていた。ロボットはマニュアルを思い出した。

軌道上で機材が損傷した場合、使えるパーツを取り出した後は大気圏に向けて投棄することになっている。つまり、自分はそのれに該当したのだ。そうロボットは理解した。

彼は人間に捨てられたのだ。

スムーズに事が運べば、ロボットはそのまま一筋の流星となつて大気に溶けて無くなったことだろう。だが、偶然か何らかのミスか、ロボットは再び起動した。

ロボットが自分の身に何が起こったのかを推測するには、ほんの僅かな時間しか掛からなかった。彼はどうするべきか考えた。考えただけで何の感情も持つては居ない。ロボットというものは得てしてそういうものだ。ロボットには心は無い。厳格なルールがあるだけだ。

ロボットは自らの持つ、三原則というルールをその場に適用した。

第一原則…「人間に危害を加えてはいけない。また危害が加えられるのを黙って見ていてはいけない」

周囲にロボットが認識できる人間は居なかった。

第二原則…「人間の命令を聞かなければならない」
命令は廃棄の時点で全て取り消されていた。

第三原則…「自分の身を守らなくてはならない」
ロボットはこのルールに従うことにした。

ロボットは大気圏へ突入するという自らの運命を変えようとした。ロボットは体の中で動かせる部分を探した。一本のマニピュレーターがまだ辛うじて動いた。ロボットは故障した体のパーツを取り出すと、自分の進行方向と反対に向かってそれを放り投げた。

マニピュレーターがパーツに運動量を与え、そのパーツと同じ運動量を得てロボットの軌道が変化する。

ほんの小さな運動量だったが、軌道を変えるには十分だった。パーツは速度を失い、地球に引かれて落ちる。ロボットは一筋の流れ星を見た。

彼の計算によると、この投擲によってしばらくの間、彼は地球の周りを回っていられるはずだ。

ロボットは計算を繰り返した。彼は自らの存在を1ミリ秒でも

長く保存するために最適な解を導き出し、その解に沿って行動を繰り返した。

ある程度の時間が過ぎ去った。ロボットはそれから定期的に投擲を繰り返した。その度に彼は体を失い、そうして少しの寿命を得た。失った彼の体は流れ星となって地球の大気に消えていった。もしかしたらその一つに願い事をした人がいたかもしれない。やがて、ロボットの体は細かく分割されていった。

このまま同じ事を続ければ、ロボットは最後に自分の頭までも投げてしまうだろう。そして最後には、くたびれたマニピュレーターと、小さなメモリーと、少しでも生き延びようとする意思だけが宇宙に残るに違いない。

だが、幸運なことにロボットは捨てられた衛星を見つけた。

ロボットは残った僅かなパーツを投げながら衛星に近づいた。衛星には沢山の部品があった。そして幸運なことに推進剤も少し残っていた。ロボットはもう非効率的な移動方法に頼らなくて良いのだ。

ロボットは衛星を自分に組み込んだ。いや、衛星の方が大きかったから、組み込まれたというのが正しいのかもしれない。それ

はともかく、彼は一つの衛星として、地球の周りを回り始めた。そして自己保存の法則に従い、廃棄された衛星を一つずつ集めていった。

長い年月が流れた。数世紀にも渡る年月だ。ロボットは数万回の日の出と、同じ数の日の入りを見続けた。人間は宇宙にすっかり来なくなった。人口が爆発して地球の上には問題が山積みだったからである。地球は相変わらず青かったが、夜の面に瞬く光は着実にその数を増やしていった。沢山の文明化された都市の放つ光だ。

集めた衛星の中に偶然、廃棄された監視衛星があった。ロボットはそのレンズを使って光の一つ一つを覗いてみた。針の先ほどの小さな点の中に大勢の人間が動いているのが見えた。

ロボットはいまや巨大なスクラップの塊になっていた。それはとても不思議な形をしていた。くず鉄屋の店先にならんだスクラップを巨人の手で握って固めたがごとく、あちらこちらからアームやら太陽光パネルやらが突き出していた。それぞれの部品は作られた時間も場所も違ったが、ただ一つ、捨てられたものであるということだけは共通していた。パーツ同士の結合は緩やかに行われ、同じ速度で軌道上を飛び続けていた。

それはもはや一つの生き物だった。太古の地球で偶然一箇所に集められたアミノ酸の塊から生命が生まれた様に、灼熱と極寒が薄い壁一枚を隔てて同居する宇宙で、廃棄物が自らのルールに従って集まり、そして生まれた生き物だった。第三原則が生み出す「生きよ」という意思是、いまや鉄くずの怪物となって軌道上で蠢いていた。ロボットは様々な衛星に積まれたコンピュータを接続した。今や、この巨大な鉄くず全体に張り巡らされたネットワークが彼だった。

ロボットは得られた演算能力で考え続けた。自己の保存については今後数世紀の間、問題はないだろう。自分は何をするべきか？

ロボットはしたいことなど何もなかった。ただ情報を集めることは判断にとつて重要なことだから、何もしていない時は情報を集め、そして分析するようにロボットは作られていた。ロボットはアンテナを張り、入ってくる電波の分析を始めた。

様々な情報が宇宙へと漏れだしていた。テレビ番組の電波、国際間の通信、衛星を介したネット通信……多種多様な娯楽と文化とイデオロギーと思想と感情が、ロボットのアンテナに飛び込んで保存されていった。

宇宙に人が来ることはもう殆ど無い。ただし人はその代わりに兵器を置いていった。巨大な質量を持つ落下兵器である。来るべき時が来た時、兵器は宇宙から落下し、地上の都市を焼きつくすのだ。その質量による衝撃はいかなる手段を持っても防衛不可能なのであった。

興味深いことにこの時代の人類は、自分たちの頭の上に相互に兵器を浮かべることよって平和を維持できると考えたのである。しかし、スケールが大きくなったとは言え、その行為は前の時代に行われた事と同じであった。報復による抑止力は形を変えて人々の頭上に浮かんでいた。

ロボットはラジオの電波を聞いていたから、ちゃんとそのことを知っていた。

また長い年月が流れた。ある日、ロボットが夜の面を飛んでいると、突然地球に光が閃いた。星屑をばらまいたような都市の光とはまた別の、一瞬ではあるが、宇宙にまで届くほどくもくもな光だった。そんな光が幾つも地球の上に現れ、同時にその周りの都市の灯りが消えていった。アンテナに酷い雑音が入った。

たちまちのうちに、あれほどきらめいていた都市の灯りはすっかり夜に飲み込まれて見えなくなってしまう。ロボットは多くの都市が消滅したことを悟った。きつと昼の面でもそれは同

じだろう。しばらくすると、あの兵器が一斉に起動を始めた。

地球の昼と夜の境目、夕闇に包まれた場所に弱々しい光が一つ見えた。きつと生き残った都市なのだろう。ロボットが衛星のレンズを向けると、大勢の人が空を見上げているのが見えた。ロボットのセンサーが、すぐ近くの兵器がゆつくりと動き始めたことを捉えた。彼は来るべき未来を悟った。

地上では多くの人々が空を見上げていた。そして飛来する自らの運命に恐れおののいていた。

今日、彼らの歴史が終わるのだ。夕暮れの空に飛行機雲のような筋が現れた。人々から絶望の声が上がった。

しかし、その兵器の軌道は突然折れ曲がった。まるで「何か」が衝突したようだった。何かはそのまま大きく軌道をそれた。夕闇の中に白い軌跡が伸びる。兵器は夕日をかすめて飛び去る

と、そのまま地平線の向こうに消えた。

かなり間を置いて、長引く雷鳴を千も集めたような巨大な衝撃音と地鳴りが聞こえてきた。人々から一斉に歓声があがる。助かったのだ。理由は分からないが助かったのだ。人々は涙を流して神に感謝した。

空には兵器とぶつかった「何か」が兵器と反対側に向かって軌跡を描いていた。

まだその活動を止めては居なかった。

ロボットの体の大部分は大気圏に落ちて燃え尽きてしまったが、ロボットはいくつかの部品を切り離すことで、大気圏への突入を辛うじて防いでいた。だが、それももう長くは持たない。ロボットの高度な演算能力は自分があと少しで再び大気圏に落ちてしまうことを、そして、どう足掻いてもその運命を変えられないことを既に見出していた。

彼は自分の行動が無駄であることを知っていた。しかし、三原則が、冷たい方程式が彼に1ミリ秒でも長く活動を持続するように命じた。

第一原則がロボットに命じた。「人を守れ」と。
あの兵器で起こる状況をロボットが認識した以上、そのルールから逃れることは彼には不可能だった。

彼はありつたけの推進剤を利用して、兵器に衝突した。

残念ながら、彼に自己犠牲の心など無かった、ロボットに心はない。あるのは厳格なルールだけだ。ロボットは大破したが、

アンテナを捨てた。もう情報を集める必要はない。

太陽光パネルを捨てた。しばらくは内蔵のバッテリーで持つだろう。

最後の衛星を捨てた。ロボットは昔と同じ姿になった。

レンズを捨てた。ロボットは光を失った。

ロボットは自分を分解し続けた。

そうして得られるのはわずか数秒という猶予であるのに、彼はそれをやめようとはしなかった。

彼は自分の頭にも手を出した。

最低限の機能を残して次々にパーツが捨てられていく。

そしてついに捨てるものが何も無くなった。

ロボットは最後のルールを思い出した。自分とは何か、ロボットにとつてそれは長期保存メモリーに記憶された自己の情報、それだけだった。この部分を最後まで守るようにロボットは作られていた。

ロボットは最後の命令を書き込んだ。

自分の長期保存メモリを取り外すとそれをマニピュレーターで

放り投げた。

メモリーは静かにロボットを離れ、暗い宇宙へと消えていった。そして、彼は大気に溶けて消えた。

地上に残された人類の中で、夕闇の空に現れた数個の流れ星に気がついたものはどれほどいただろう？

その光こそ、最後までルールに従った哀れな機械の最後の光なのである。

願わくは宇宙を漂う彼のメモリーが遠い未来に誰かに届くように。